

DIGITAL ARCHIVES



デジタルアーカイブの営みをつくる
アートプロジェクトの現場から

ART PROJECT



東京文化発信
プロジェクト

D I G I T A L A R C H I V E S



デジタルアーカイブの営みをつくる
アートプロジェクトの現場から

A R T P R O J E C T

本冊子は、多様なアートプロジェクトの現場を創造し、動かしている人たちとともに、デジタルメディアを活用したプロジェクトの記録とその営みについて考え、実践し、その過程での発見やアイデアを共有するものです。

デジタルアーカイブの営みをつくる — アートプロジェクトの現場から

目次

- 03 はじめに：企画を守り、育て、残し、伝えるために 森司
- 05 論考：デジタルアーカイブ・プロジェクトが目指すもの
— アクティビティを追い越すアーカイブのために
須之内元洋
- 07 レポート：アートプロジェクトにおけるアーカイブとは
— デジタルアーカイブ・プロジェクト最終報告会 齋藤歩氏の講演より

とりくみの全体像

- 10 デジタルアーカイブ・プロジェクト2014年度実施概要

アートプロジェクトの現場から

- 16 Case-1 三宅島大学誌
- 20 Case-2 長島確のつくりかた研究所
- 24 Case-3 としまアートステーション構想
- 28 Case-4 きむらとしろうじんの「野点」in 釜石・大槌
- 32 Case-5 旅するリサーチ・ラボラトリー
- 36 Case-6 小金井アートフル・アクション！

ふりかえり

- 40 クロストーク：最終報告会を終えて 齋藤歩×須之内元洋×熊谷薫
- 45 ふりかえりと今後の課題 熊谷薫

はじめに

企画を守り、育て、残し、伝えるために

東京アートポイント計画ディレクター 森司

アートプロジェクトの日常業務で生まれるさまざまなものをデジタルアーカイブ化して記録を残すことを推奨し、2014年度の取り組みとして東京アートポイント計画の共催団体や関連するアーティストなどにデジタルアーカイブシステムの実施導入のための実証実験のお願いをした。複数の団体が積極的に取り組み、興味深い成果や今後の方針を検討するために重要な課題を示してもらえた。テクニカルな質問は多々あったが、本質的な問いとして次のふたつがあったように思う。

- 1) なぜデジタルアーカイブに取り組む必要があるのか。
- 2) どうして現行のシステム (P.11参照) の利用を推奨するのか。

上記ふたつの問いは、アーカイブを構築するという行為の必然性の確認だ。現行のシステムは、既に有用性が確認された方法として採択したわけではない。Tokyo Art Research Lab (以下TARL) の研究・開発プログラムを通じて、「アートマネジメントのプロセスを可視化する」という課題を過去数年にわたって検証してきた経緯を背景にする、ひとつの仮説としての取り組みだからだ。プロジェクトマネジメントの流れはPDCA (Plan・Do・Check・Act) サイクルで捉えられているものの、現実的にはP-Dで終わるなど、実施することが目的化されているケースが多い。マネジメントする側もアーティスト側も、記録を残し、発表し検証するC-Aゾーンの活動が手薄になりがちで、その状況の改善を急務とすることが、デジタルアーカイブ・プロジェクトを行う判断の前提である。既に終了したアートプロジェクトが、一体何をしたのか、活動団体にどのような意思決定のプロセスがあったのか。そこを明らかにする活動が行われない訳は、人手とお金と時間の無さとされてきた。気持ちがあってもできない理由の一因としては、確かにそうであるだろう。しかし、それは本当の理由なのだろうか？

TARLにおいてPDCAサイクルの事務的な検証をするなかで、レコードマネジメント (文書管理) の概念と方法を学ぶこととなった。雑駁な説明をすると、

システム化されたこの方法に従えば、ルーティンワークとして書類管理ができるというものだ。この文書管理、保存の考え方はアーカイブズ学の領域に接合する。この「資料の保存」の現場の隣接エリアにデジタル（情報資産）の活用がある。いわゆるデジタル機器とネットワーク環境の格段の変化が、これまで大きくて強い施設や団体にしかできないと思われていたことが実現できる環境を用意している。たとえば、プログラムを組むのではなくオープンソースのソフトを活用するということ。リソーススペースの活用は、この観点からだ。デジタルデータを一元管理することで、アーカイブする意識の顕在化という目的も託している。本プロジェクトに取り組むことでPDCAサイクルの「為す・残す・伝える・評価する」を統合することの実現と展開への一里塚としたと思う。アートプロジェクトに費やされる想いや人的、資金的エネルギーに比して、その活動が可視化され、評価される部分はあまりに少ない。アートプロジェクトは、作品として形状を得たものだけではない。その準備を含めたプロセス、そしてプロセスマネジメントの鮮やかさに対し、活動の担い手であるプロジェクトマネージャー側の活動の本質的な評価がされるべきだ。活動を可視化するアーカイブへの取り組みは、活動の持続性や評価を担保する有効な資料となる。アートNPO団体の育成において、デジタルアーカイブの取り組みは今後ますます重要度を増すことになるだろう。本書において報告された内容は、プラスワンアクションで日々の活動をデジタルアーカイブ化するために必要な環境整備への改善のヒントを多分に含むものだ。2014年度の成果の検証を踏まえ、来年度以降の展開を図っていきたい。

これまでの経緯

2010年

TARLにてアートプロジェクトの運営や評価に関する講座がスタート。成果の一部をまとめた『アートプロジェクト運営ガイドライン』を制作。

2012年

「記録調査」「アーカイブ」「評価」の複合プロジェクトがスタート。各領域の専門家の協力のもとに日比野克彦氏の「種は船」プロジェクトを事例として研究。映像データを対象にデジタルアーカイブ・システムを導入。

2013年

「P+ARCHIVE」事業として『アートプロジェクトの運営ガイドライン』をもとに『アート・アーカイブ・キット』を制作。レコードマネジメントの手法を用い、アートプロジェクト用の業務分類表を作成。アーカイブ構築の基礎をまとめた。デジタルアーカイブ・プロジェクトがスタート。「アートプロジェクトのインバクトリサーチ」の一環として日比野克彦氏の「明後日新聞社文化事業部」を対象とし、アートプロジェクトで運用可能な仕組みづくりを検討。『アート・アーカイブ・キット』の業務分類表にもとづき、デジタルアーカイブにデータを格納できる仕組みを準備。

論考

デジタルアーカイブ・プロジェクトが目指すもの —— アクティビティを追い越すアーカイブのために

デジタルアーカイブ・プロジェクト テクニカルディレクター 須之内元洋

アーカイブというと、権力が受動的な管理人（アーキビスト）に記録の集積を要請し、研究者等の記録の査定者を介して記憶が記述され、ミュージアムや書籍などを介して社会に媒介されるといった枠組みがイメージされる。しかし、この枠組みだけでは、権力や管理人によって価値があると判断された対象のみがアーカイブされることになる。アートプロジェクトには、それぞれに固有な社会との関わり方、動機、目的、手法、関わる人、期間や規模があり、その多様性や枠組みのしなやかさが特徴である。まだ社会が価値だと認めていないことに目を向け、価値を見出すことを実践しているアートプロジェクトも数多く存在する。アートプロジェクトのような活動にとって、社会との接点または自分たちの活動の後ろ盾となるメディアとして、活動主体である自らが営むデジタルアーカイブは、今後大きな役割を担う可能性があるだろう。デジタルアーカイブという言葉は概念的で広い意味を持つが、我々が取り組もうとするアートプロジェクトのデジタルアーカイブを、次のように定義する。

●何をどのように記録するのか、記録した資料にどのようなメタデータ（記録資料の様々な属性を表現するデータ）を付与して記録資料を運用するのか、蓄積した記録資料をどのように活用するのかについて、活動主体みずからが中心となって検討を行う。これには、活動の動機や目的、活動形態といったそれぞれのアートプロジェクトのアイデンティティ、記録に費やすことのできるリソース（人・時間・お金）が考慮されるため、客観的に自身の活動を捉え直す契機となる。

●活動主体が日常的に遂行可能な、一定の手法によって、継続的な記録を行う。ウェブブラウザで利用できるデジタル資産管理システム（以下、DAM:Digital Assets Management System）を導入し、証拠性を担保して記録資料を一元して保管・運用することにより、最小のコストで記録資料を資産化する。

●社会に対するアートプロジェクトの表現・ひらき方（活動紹介、評価・報告など）や、活動のエンパワメント（振り返り、新たな視

点の獲得、活動改善、協働メンバーの獲得など）を促進するような記録の活用を行う。

●汎用性のあるデジタル機器やデジタルメディアを適宜援用しながら継続的に運用する。デジタルアーカイブの利点を活動の中に位置づけ、既存の活動形態やプロジェクト個別の事由に馴染むような手法を、アジャイルに構築・実践することを重視する（アーカイブの営為を全てデジタル化すること自体を目的としない）。



【デジタルアーカイブのススメ】

アートプロジェクトのデジタルアーカイブを構築する試みは2013年度にはじまった。アーティストの日比野克彦氏監修のもと、新潟県あづみ原で展開されるアートプロジェクト「明後日新聞文化事業部」をケーススタディとして、2003年から11年間にわたって記録された写真（約3万5千点）と瓦版「明後日新聞」（約160号分・不定期発行）のデジタルアーカイブ化を試みた。成果の詳細は、冊子『デジタルアーカイブのススメ』（<http://www.tarl.jp/cat.output/9759.html>）を参照のこと。

続く2014年度は、東京文化発信プロジェクト室の事業である「東京アートポイント計画」が共催する複数のアートプロジェクト団体に、それぞれのデジタルアーカイブを構築していただき、運用モ

デルの改良、個別のニーズの発掘、支援ツールや記録手法の開発に取り組んだ。どの参加団体も、改めて客観的に自分たちの活動をとらえ、自分たちにとってのアーカイブの意味、それぞれに有効な記録手法や活用手法の検討を行った。逆説的ではあるが、アーカイブを構築することによって、記録資料から抜け落ちていたプロジェクトの記憶について気付かさね、アーカイブに何が残り、何が残らないのかという点について理解を深めた。また、より豊かな記録のためのアイデアが沢山生まれた。例えば、プロジェクトの記録をその日のうちに完了し、現場で記録を積極的に共有・参照しながら、より深い協働を実現していくための仕組みが提案された。記録と記録活用の速度がプロジェクトの活動速度を追い越すような視点といえる。

レポート アートプロジェクトにおけるアーカイブとは
デジタルアーカイブ・プロジェクト最終報告会 齋藤歩氏の講演より

アーカイブズ学の研究者・齋藤歩氏はテリー・クックが執筆した2013年の論文*1をもとに、アーカイブ*2のこれまでとこれからを考える上で参照になる、4つのパラダイムの表を作成した（表1）。クックはアーカイブの変遷について「プレモダン」「近代」「ポストモダン」「現代」の4つの歴史区分に即し4つのパラダイム展開があるとし、時代ごとのアーカイブの注目点とアーキビストの役割を整理している。プレモダンの時代においては、フランス革命をきっかけに、国家における国民の生きている証をどう残すかが課題になり、まずは行政において公文書として、その市民が「存在し生きていた」という証拠を残すことが基本となった。近代になると、日々の暮らしのパーソナルな部分を捉えよう

とし、記憶（メモリー）をどう残すか、私文書をどうするかという議論が進む。さらにポストモダンになると単一のアーカイブの組織からこぼれおちる記録の関係性を、組織の枠を超えて社会全体のなかで捉えていくことが課題となった。それから現代になり、コミュニティのアーカイブをどう構築するかが注視される段階になったという。さらにクックによる考察を見てみよう。第1のパラダイムにおける「証拠」は客観的に構築されるものであり、それを担うアーキビストは「中立」「客観的」「公平」な立場であり、制度の中で構築された資料を受動的に受け取り、整理していた。第2パラダイムにおける「記憶」は主観的につくられるもので、個人、アーカイブズ組

パラダイム	1	2	3	4
時代	premodern プレモダン (19世紀)	modern 近代 (1945～)	postmodern ポストモダン (1970～)	contemporary 現代 (1995～)
focus of archival thinking アーカイブズの注目点	evidence 証拠	memory 記憶	(identity) アイデンティティ society 社会	community コミュニティ
archivist アーキビスト	passive curator 受動的な管理人	active appraiser 積極的な査定者	societal mediator 社会の媒介者	community facilitator コミュニティの推進役

表1 アーカイブズのパラダイム・シフト（テリー・クック 2012）作成：齋藤歩

織のいずれにおいても記憶は選択される。ここでのアーキビストはより積極的になり、自ら記録に向かって働きかけねばならなくなった。第3のパラダイムではアーカイブは「社会」を映し出すものであり、「過去～現在～未来」「作成者～記録～利用者」を媒介し、社会資源としてのアーカイブに注目するようになる。第4のパラダイムではアーキビストも、そもそもアーカイブの制度が想定していた社会からこぼれ落ちる、特殊なコミュニティの記録も対象にしようとするようになったという。コミュニティを対象とし、コミュニティのファシリテーターがアーキビストを兼任する第4パラダイムについて、扱いはまだ検証途中であるとしながらも、アートプロジェクトのアーカイブは第4のパラダイムを参照にするのが有効かもしれないと齋藤氏は指摘する。コミュニティの活動は、中心(制度)から外れ周縁に位置するもので、ある種アマチュア的なものと認識されていたが、近年研究対象となってきたのだ。とはいえ、齋藤氏が強調していたのは、アーカイブの考え方は前の段階のものを乗り越えてバージョンアップしているのではなく、4つのどれもが重要で、等価であり、段階的に積み重なること。あくまでも証拠を重視する考え方が基礎であり、アートプロジェクトのアーカイブ

はメモリーに偏重しがちなので、注意すべきだという。今回、齋藤氏によるテリー・クックのパラダイム展開の整理を伺い、アートプロジェクトのデジタルアーカイブ・プロジェクトがまさにこの第4のパラダイムに呼応していると感じられた。各実施団体では、その中にアーキビスト的な役割を担う人が生まれはじめ、プロジェクトの実践とアーカイブを構築することが並走するようになった。また彼らは活動全体をファシリテートし、コミュニティを強化する役割も担っていてもいる。アートプロジェクトの活動にとって重要な記録のコアはメモリーに宿ることが多いが、それだけを残しても無名で無形な活動の残し方としては弱いと言わざるを得ない。あくまでも証拠性のある文書を残した上で、さらにこれまで残すことの出来なかったメモリーを蓄積してこそ、ボトムアップで草の根的な市民活動のアーカイブとして説得力があり、豊かなものになるのだろう。

[デジタルアーカイブ・プロジェクト コーディネーター 熊谷薫]

*1—— 齋藤氏に紹介いただいたテリー・クックの論文 Terry Cook, 'Evidence, memory, identity, and community: four shifting archival paradigms' in *Archival Science*, Volume 13, 2013, pp.95-120

*2—— 齋藤氏は「アーカイブズ archives」を使用していたが、本書では「アーカイブ」と統一させていきました。

とりくみの全体像

デジタルアーカイブ・プロジェクト 2014年度実施概要

プロジェクトの運営体制や、どのように活動が展開されていったか、デジタルアーカイブの基本ツールセットなどについてみよう

デジタルアーカイブ・プロジェクト 2014年度実施概要

2014年度のデジタルアーカイブ・プロジェクトは実験的な試みとしてスタートした。昨年度までの成果としてアーカイブ構築のための基本的なシステムは用意できたものの開発段階であり、検証実験を行う必要があったため、東京アートポイント計画が共催するアートプロジェクトの運営団体に、実際にシステムを使用し検証する仲間としてデジタルアーカイブ・プロジェクトへの参加を呼びかけた。

参加した団体は、『アート・アーカイブ・キット』に含まれる、「業務分類表」にもとづき、リソーススペースに資料を保存することができるほか、各団体の運営事情に合わせた、リソーススペースやビューワーのカスタマイズを、テクニカルディ

レクターとコーディネーターのサポートのもと行うことになった。

今回はデジタルアーカイブ・プロジェクトの実施方法自体を実証実験することからはじまった。まず、各団体にデジタルアーカイブのシステムを使いこなすことを推奨し、そのための基礎的な体制づくりや、運用フローの構築、目標設定などを行った。各団体に対しては2段階の目標を想定していた。第1段階はデータを無選択的に保存して一元管理を図り、主体が入れ替わりがちなアートプロジェクトのマネジメントのスリム化であり、第2段階は一元管理されたアーカイブを、一般に公開するためにウェブサイト上でビューワーの公開を行うことである。

参加団体

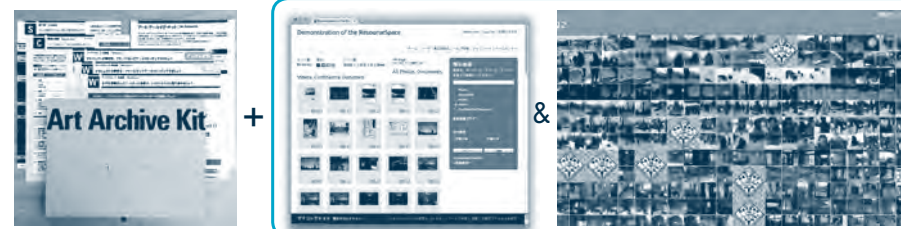
参加を呼びかけた18団体に対し、15団体に対してアーカイブシステムのアカウントを発行。11団体が運用に至り、6団体が最終報告会に出席した。

最終報告会出席プロジェクト名

- 三宅島大学誌
- 旅するリサーチ・ラボラトリー
- 長島確のつくりかた研究所
- 小金井アートフル・アクション！
- としまアートステーション構想
- きむらとしろうじんじんの「野点」in 釜石・大槌

デジタルアーカイブ・プロジェクトの基本セット

各団体のオーダーにより、カスタマイズ可能

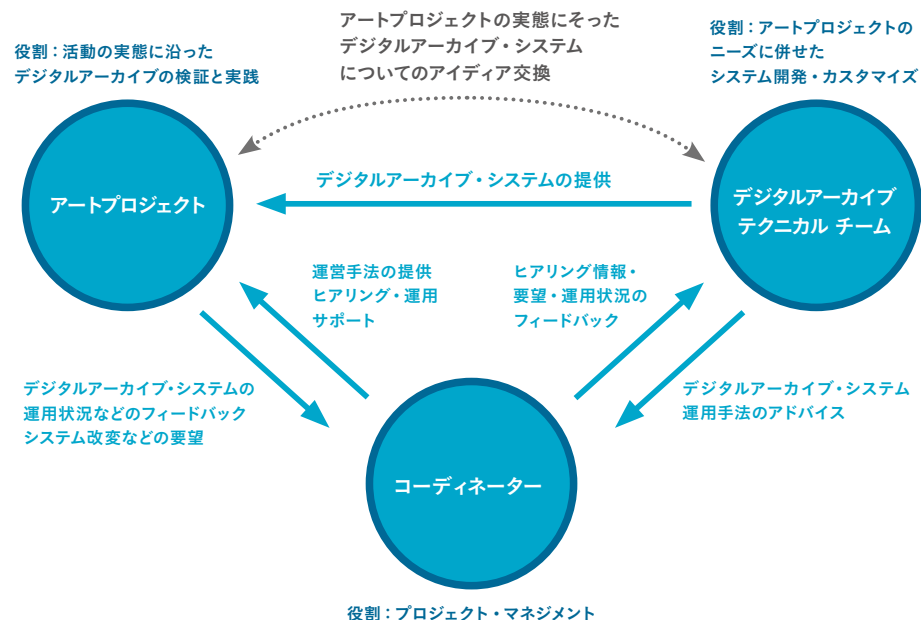


「アート・アーカイブ・キット」
アートプロジェクトの
アーカイブ・マニュアル
(2013年作成)

「リソーススペース」
資料を一元管理するための
データベース

「ビューワー」
アーカイブした資料を公開するための窓
Image from “明後日アーカイブ”

2014年度の運用体制



事業担当者

東京アートポイント計画

ディレクター	森司
プログラムオフィサー	佐藤李青

デジタルアーカイブ・プロジェクト チーム

テクニカルディレクター	須之内元洋
コーディネーター	熊谷薫
テクニカルサポート	吉岡理恵

2014 年度実施スケジュール

4 月 21 日

第 1 回 レクチャー & 説明会

担当者：レクチャー 須之内、モデレーター 熊谷
デジタルアーカイブ・システムの仕組みを説明し、『アート・アーカイブキット』を配布。デジタルアーカイブ・プロジェクト参加を呼びかけ、デジタルアーカイブのデモンストレーションを実施。

—

4 ～ 5 月

各団体との個別打ち合わせ

担当者：熊谷
要望があった団体向けに、改めてシステムの使用方法のレクチャー及び、疑問点、要望、感想などのヒアリングを実施。

—

5 月

運用のための確認事項を整理

担当者：熊谷
各団体へのアカウント発行に向けて、内部体制の確認、システムの導入方法、運用の方法、目的の確認を行った。デジタルアーカイブのデータを管理する方法を検討するためヒアリングを実施。結果、2014 年度はシステム管理の簡易化のため、東京アートポイント計画及びデジタルアーカイブ・プロジェクトチームがサーバを管理することに。

5 ～ 7 月

アカウント開設

担当者：須之内、吉岡
参加意思の確認がとれた団体に対し、サーバを設定しアカウントを開設。

—

6 月 1 日

第 2 回 デジタルアーカイブ説明会

担当者：熊谷
デジタルアーカイブ導入に躊躇している団体に向け、改めてシステムについての説明、使用方法のレクチャーを実施。加えて、アーカイブやデジタルアーカイブの具体例を紹介し、より噛み砕いた説明を行った。

—

7 月 25 日

デジタルアーカイブ・プロジェクトの
メーリングリストとフォーラムを開設

担当者：熊谷、吉岡
決定事項の通知や勉強会の周知を目的に、東京アートポイント計画の全共催団体を登録したメーリングリストを開設。自由に情報交換ができる場としてフォーラムを開設。マニュアルを配布した。

7 ～ 8 月

各団体との個別打ち合わせ

担当者：熊谷、吉岡
要望のあった団体に対し個別相談を実施。順次リソーススペースのカスタマイズを行い、必要なメタデータをつけるために入力項目の整理などを行った。

—

8 月 25 日、27 日、31 日

デジタルアーカイブ・デー

担当者：熊谷、吉岡
東京文化発信プロジェクト ROOM302 を自習室として開放。デジタルアーカイブチームが待機し、質疑応答の場を設けた。

—

9 月

各団体との個別打ち合わせ

担当者：須之内、熊谷
システムを運用してみでの実感を調査、及び具体的なニーズをヒアリング。個別団体向けにシステムの調整や開発、ビューワーなどのアウトプットの検討を開始。固有のニーズの中から汎用性があり、他団体が活用可能なものがあれば、新たなツールとしての開発の検討を開始。

—

9 月 25 日

第 1 回 勉強会

担当者：熊谷
デジタルアーカイブの活用事例を紹介し、参加のモチベーションを喚起。各団体からプロジェクト参加の動機をヒアリング。システム運用の課題や疑問点、解決方法を各団体で共有・ディスカッションを行い、活動の相対化を狙った。

—

11 月 30 日

第 2 回 勉強会

担当者：須之内、熊谷
個別相談で見てきた目標やデジタルアーカイブに留まらない活動の記録手法を共有。具体的にどのようなシステムやツールがあれば、活動の核となる部分が残せるかが明らかになってきた。

12 月

各団体との個別打ち合わせ

担当者：須之内、熊谷
開発中のシステムやツールについて、課題と要望を整理し、プランを検討。改めて団体としての長期目標と今年度内に到達する短期目標を設計。

—

2015 年 1 月 19 日

第 3 回 勉強会

担当者：熊谷、須之内
第 2 回勉強会や個別会議を踏まえ、さらに具体化されたツールについて情報を共有。デジタルアーカイブ・プロジェクトの熱量がメーリングリストなどを通して他団体にも伝播し、これまで参加していた 6 団体以外からの参加も。

—

2 月 2 日

最終報告会（公開）

プログラム

【第 1 部】
クロストーク
「生成を続けるシステムとしてのアーカイブ」
ゲスト：齋藤歩（学習院大学）
ホスト：須之内元洋（札幌市立大学）、熊谷薫（デジタルアーカイブ・コーディネーター／アートマネージャー）

【第 2 部】
活動報告
「東京アートポイント計画
デジタルアーカイブの実践」
モデレータ：熊谷薫

第 1 部では須之内がこれまでの活動について概要を説明し、アーキビストである齋藤歩氏からはアーカイブの歴史の変遷や、最先端のアーカイブスの状況のレクチャーを行った。第 2 部では参加団体がこれまでの活動の成果や現状、課題、所感などを発表した。

2014年度によく出た質問 (Q&A)

Q. アーカイブとはどんなことを指すのですか？

A. 記録を保存すること。保存する資料群や、その保存場所自体のことも指します。

Q. デジタルアーカイブは従来のアーカイブとどう違うのですか？

A. コンピューターを利用して資料をデジタル化して保管し、インターネット等の利点を生かし運用するのが特徴です。情報を一元管理し、簡単に検索することができます。またメディア環境との親和性も高く、編集に柔軟性があります。

Q. DropboxやGoogle Driveなどのオンラインストレージサービスにデータ保存するのと、デジタルアーカイブ・システムはどう違うのですか？

A. メタデータ(データの作成日時や作成者、データ形式、タイトル、注釈などの基本情報)を付与し、管理できることです。デジタルアーカイブされたデータは、ビューワーに出力するなど、さまざまな活用ができます。

Q. デジタルアーカイブを各団体で実際に運用する際、ランニングコストはどのくらいかかりますか？

A. サーバーコストだけなら年間1万円程度。年々コストは低下していくので、少ない人的・金銭的リソースしかなくとも運用することが可能です。

Q. アーカイブされた資料はどう活用できますか？ 具体的な事例を教えてください。

A. 例えば、格納した写真を整理し、一覧できるビューワーを設置したり(参照：くすかきアーカイブ)データを用いて書籍などを作成するための基礎資料として活用することができます。その他、データを用いてインフォグラフィックを描いたり、美術館では作品データベースを公開し、広報や企画の実施に役立てています。

Q. デジタルアーカイブを運用することのメリットは？

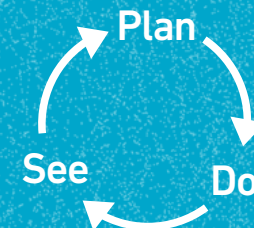
A. 必要なデータへのアクセシビリティが上がり、活用しやすくなることにより、データが共有され「属人性」が下がるため、引き継ぎがしやすくなります。システムの改変が可能なので、柔軟かつ簡単に活動を管理するアーカイブの仕組みを構築できます。

アートプロジェクトの現場から

デジタルアーカイブ・プロジェクト

参加アートプロジェクトの実施概要

デジタルアーカイブをはじめた6つの団体、それぞれの取り組みについて、「Plan」「Do」「See」の3段階でみてみよう



Case—1

三宅島大学誌



三宅島大学誌活動概要

「三宅島大学誌」は2011～2013年度にかけて実施した、「三宅島大学」（三宅島全体を「大学」に見立て、さまざまな「学び」の場を提供するしくみ）を振り返り、プロジェクトの記録・共有の方法のあり方を探究するプロセスとして位置づけている。振り返りを通じ、地域と人びととの関わり方、場づくりの可能性についての考察を行っている。

アーカイブ・プロジェクト スタート時の状況

「三宅島大学」における3年間の活動の中で、すでにアーカイブ化すべき資料や撮影した写真などが大量に蓄積されている状態であった。

担当者が語る、アーカイブプロジェクトへの参加の動機



奥麻実子



加藤文俊

既に終了しているアートプロジェクトを
どう残していくかを検証したい

Plan

三宅島大学誌では、「三宅島大学」での取り組みの振り返りを2014年6月からスタートさせ、2015年3月に三宅島大学の活動を冊子としてまとめることを最終ゴールとして活動している。2014年10月に実施した公開研究会までには、デジタルアーカイブとして何か形にしたいと考えたが、三宅島大学のプロジェクト初期メンバーは既に卒業しているなど、収集すべき記録も散らばっている状態であった。デジタルアー

カイブ・プロジェクトに参加した時点で既に失われている記録もあったが、収集できる記録として想定できたのは、写真や三宅島大学の活動期間中に発行していたかわら版のPDF、三宅島大学誌として活動をスタートしてから行った関係者インタビューの音源など。加えて、三宅島大学で開講していたそれぞれの講座紹介文や、メンバーが三宅島を訪れた際に執筆していたブログがあった。



三宅島大学誌のアーカイブテーマ

散らばっているデータの収集・整理の活動を、
プロジェクトの振り返りに役立てる

Do

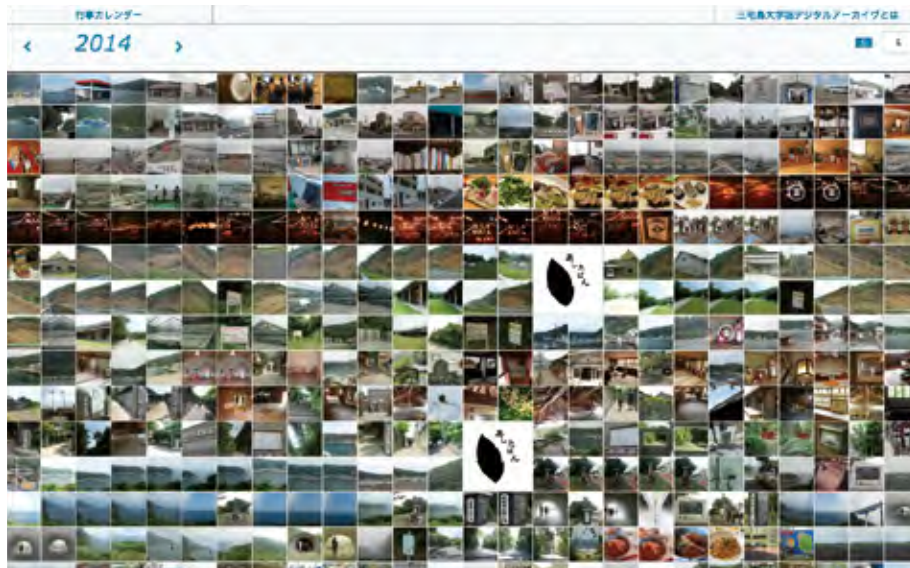
いろいろ考えていると公開研究会に間に合わないだろうと、まずは手元にある記録や資料をとにかくデータベースにアップロードしていった。同時に、普段は集まることができないメンバーに向け、Googleドキュメントなどで、「こういう資料はこうキーワードを入れてね」「このタグだけは付けておいてね」と、データをアップロードする際の最低限のルールを共有したほか、三宅島大学誌として必要な作業をまとめてリソーススペースの操作手順をマニュアル化し、アップロード作業に期限を設けて、それぞれ素材をアップしてもらうようにした。作業を通じて集まってきたのは、2万枚強の写真、映像、音声データ、PDFなど。収集したデータはビューワーに



公開研究会ではビューワーを使用して活動を振り返った



公開研究会の様子



データを時系列に一覧できるようにしたビューワー画面

入れ、時系列に見えるように整理した。データを地図上にマッピングして活動のヒートマップにしたり、三宅島の自然が噴火の影響から徐々に再生されていく過程も再現しできるかもしれないと、様々な可能性を考え、ビューワーのカスタマイズを検討した。



公開研究会の様子

See

終了したプロジェクトのアーカイブを構築することが、どこにどうフィードバックされていくのか、活用するビジョンが見えづらく、取り組みのスタート時にはデータの収集が進まなかった。しかし実際にデジタルアーカイブに取り組んでみると、三宅島大学の活動に参加していたメンバーの心へのフィードバックが起り、活用のイメージも湧いてきた。三宅島大学誌で制作する冊子は「編集された記録」になり、デジタルアーカイブのビューワーでは生の記録をそのまま見せることで、冊子と相互に補完するような関係ができればと考えている。

アーカイブ担当者の所感



時系列に写真が並ぶビューワーでは、自分の撮った写真の間に他のメンバーの写真が割り込んでくる。同じ時刻にそれぞれがどこで何を見ていたのか、それがわかるだけでも興味深い



メンバーがプロジェクトに集中していたり、危機的な事件が起きたりした場合には、記録がまったく残らないこともある「ない」という事実の顕在化が、逆説的に当時を思い起こすきっかけにもなった

今後さまざまな展開事例やビューワーのショーケースが増え、単なるデータの保管庫ではない「アーカイブ」に触れることで、さらにその可能性を発見できそうだ

テクニカルディレクターとコーディネーターの所感

あらゆる種類の記録資料を一覧ビューワーを介して眺めた様は圧巻です。環境特性(海や山)が強く反映される一方、皆が集中している時間や修羅場の記録は手薄になりがちという、コミュニティによる記録の性質も垣間見えました。ドキュメントとアーカイブの連動も楽しみです。[須之内]

今回デジタルアーカイブ構築のために急ピッチに作業を進めてくれました。その後ビューワーを使い振り返る会を実施し、一旦終了した活動を関係者の中で改めて思いだし、写真資料の対外的なインパクトを体験し、記録写真を検証することの意味を見出してくれました。資料群が一覧できれば、次の活動を行う際の参考にもなり、さらにはそれが次回活動のプレゼン資料にも使えると気づいたとのこと。デジタルアーカイブを活用し、コミュニケーションをとることにより、活動の後に弱まってしまうコミュニティをいかに維持するかについて意識的になってくれたのが印象的でした。[熊谷]

Case—2

長島確のつくりかた研究所



Photo : Kazue Kawase

長島確のつくりかた研究所 活動概要

研究員の自治によるユニークかつ多彩な研究活動を通して、既存の方法論ではカバーしきれない「つくりかた」を研究開発するプロジェクト。今後のアートプロジェクトに多角的に貢献できる人材を育成することを目指し、若手研究員と研究主任（演劇・建築・音響・映像・写真・文筆の専門家）が、「だれかのみたゆめ」を共通テーマに自治運営する研究室を立ち上げ、リサーチや、成果発表の方法などを考察・実行する。

アーカイブ・プロジェクト スタート時の状況

「長島確のつくりかた研究所」というアートプロジェクトの中に、さらに小さな複数の研究室が立ち上がり、活動の進め方自体を作り上げている段階であり、アーカイブすべきものは、そうした小さな活動の中から生み出されている状態であった。

担当者が語る、アーカイブプロジェクトへの参加の動機



ササキユイチ

散らばっている記録物を集約して整理したい

Plan

長島確のつくりかた研究所は、現在「研究室」と呼ばれる小さなユニットに分かれ、研究員それぞれの興味関心や問題意識に基づいた研究活動を行っている。デジタルアーカイブに取り組むために、まずはアート・アーカイブ・キットを参照し、ファイ

ル名の付け方などといった、リソーススペースにアップロードする際のルール作成を行った。その後、各研究員のもとにある初年度からの活動の記録をアップロードするようにと促したが、作業が進行する気配がなかった。そのため、各研究室とデジタルアーカイブについて相談を始めたところ、そこから検討に値する問題が明らかとなった。研究室に分かれて活動しているため、誰もプロジェクトの「全体」を知らないということ（全体を望める視座の必要性）、集まること自体が目的のミーティングなど、記録物を伴っていない活動が多くあること、などである。「つくりかた（プロセス）」を研究しているプロジェクトであるため、研究活動のプロセス自体をきちんと記録していくことの必要性が改めて認識された。



長島確のつくりかた研究所のアーカイブテーマ

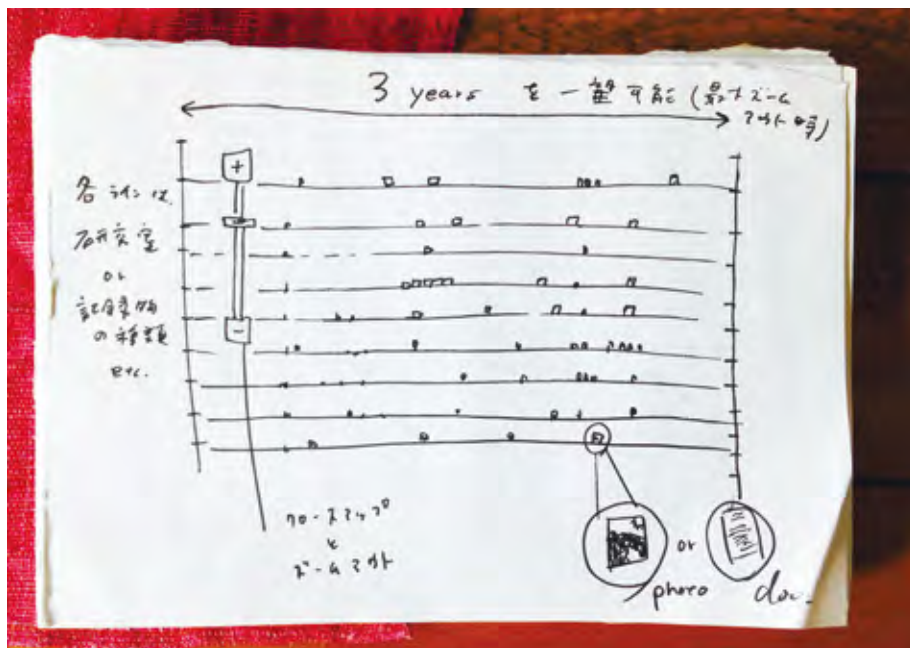
成果物とは異なる仕方で、活動のプロセスを残したい

Do

研究員28名全員にデータのアップロード作業用アカウントを発行。誰でもアップロード作業を行うことができるようにと、作業のハードルをさらに下げるべく、テクニカルチームとアップロードページの簡略化を相談している。さらに当初想定していたレギュレーションの見直しを行っている。研究室ごとに「アーキビスト」という担当者をつくり、アーキビストには常に研究室の活動のアーカイブに関心を持ってもらうように促し、アーキビストにヒアリングを行うことで、各研究室の活動履歴を整理している。活動履歴は



カスタマイズしたリソーススペースのデータアップロード画面



プロジェクト開始当初のアーカイブ構想メモ

Googleドライブのスプレッドシートをカレンダーの形式にして整理している。必ずしも記録物を伴わない活動であっても、誰が誰にどのようなメールを送っていたかなどを情報としてすくい上げることで、起きている「コト」の可視化を試みている。最終的には各研究室の活動や記録物をタイムラインとして整理し、3年分を一覧できるようなビューワーを作成することを考えている。



デジタルアーカイブに関する打ち合わせの様子

Photo : Kazue Kawase

See

アーカイブについて研究員らと相談してわかったことは、皆、アーカイブを行うことに興味がないわけではないこと。むしろ、アーカイブ・プロジェクトを通じて蓄積し可視化したい活動があるなど、アーカイブに対してさまざまな要望を持っていることがわかった。

アーカイブ担当者の所感



メンバーである研究員らとアーカイブについて話し合うことは、日々の活動におけるそれとは異なる視座で「つくりかた研究所」というプロジェクトを捉え直すことだった

システム開発者とコーディネーターの所感

小さな複数チームが独立・並列する組織体系に、デジタルアーカイブのプロセスをどうやって運営に組み込むか、担当者は大変苦心されていました。記録が蓄積されたときに、それぞれのチームにアーカイブがどう作用し、どんな活用アイデアが生じるかに注目です。[須之内]

最も目に見えづらい活動をしている団体なため、プロセスを記録し、見える化するということを真摯に検討してくれています。誰もが納得しながら自分ごととしてアーカイブ作業をすることはとても難しいのですが、そのための気持ちをそろえる作業を丁寧にやってくれたのが印象的です。リソーススペースのカスタマイズにも積極的で、団体にとって何が必要なのか、何が重要なのかを時間をかけて考えてくれているため、これからどうジャンプするのか楽しみです。[熊谷]

Case—3

としまアートステーション構想



としまアートステーション構想 活動概要

豊島区民をはじめとする多様な人々が、区内の魅力あふれる場所で地域資源を活用し、当事者として主体的にアート活動を行い、その活動がさらに多くの人々の主体性を生み出す。そんな新しい公共活動のあり方を目指し、個々人の自発的なアート活動を支援することで、地域や人々の想いをつなげるシステムづくりを目的とする。自然に発生したささやかなアート活動が結び付き、人や街とともに暮らすことができる、そのきっかけをつくり出すための文化事業と位置づけている。

アーカイブ・プロジェクト スタート時の状況

事業評価などに関わっていたコアスタッフがいるため、活動をアーカイブしていくことに関しても意欲的だった。プロジェクトスタート前からクラウドシステムなどを活用し、独自のルールで資料を整理しており、活動を残しやすい日報の書き方を実践するなど、随所に工夫があった。

担当者が語る、アーカイブプロジェクトへの参加の動機



石幡 愛

日常の積み重なりという活動形態の中で、人や活動の「じわっとした変化」に着目し、それを振り返る素材をどう集められるのか検討したい

Plan

事業の性質として、フェスティバル型ではなく、日常が淡々と積み重なっていくとい

う形のため、必ずしも何か作品のような「モノ」が残るわけではなく、残ったとしても美術的な価値の善し悪しが問題ではない。人や活動の「じわっとした変化」こそが重要で、そこに目を向けていきたいため、地味な日常の中から、その変化を振り返る素材を沢山集めておきたいと考えた。しかし、デジタルアーカイブに取り組むことで、プロジェクトを進めるだけで精一杯のスタッフに、付加的な業務を押し付けるようなイメージがある。そうした心理的負担を感じさせない、活動のアーカイブ化の仕組みづくりが必要だ。プロジェクトを運営するための行為や記録をアーカイブという文脈で見たり、活動自体にアーカイブ的な要素を埋め込むことで、楽な記録やアーカイブが考えられるのではないだろうか。



としまアートステーション構想のアーカイブテーマ

プロジェクトの実施そのものや、既にやっている行為に、
記録・アーカイブ的要素を埋め込んでみよう

Do

イベントを行う際、周知のためにPOPを立てているが、そのPOPの作り方を統一し、イベント後に裏に参加者名を書いてもらうなどして、POP自体をアーカイブしている。活動時は普段から写真を撮り一言添えてFacebookに投稿していたが、Facebookの投稿を展示物にしたり、ファイリングして閲覧できるようにしたりと2次利用をしている。また、スタッフとボランティアの振り返りの際、大きな紙に来訪した主要人物の名前や一日の中で感じたことを紙の上で雑談をするような感覚で寄せ書きのように書いている。そ



活動を記録するために工夫されたPOP

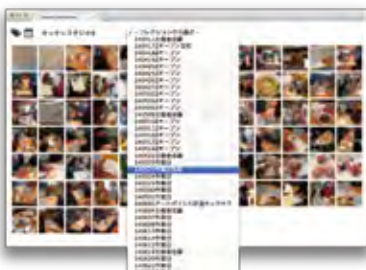


日々の活動を記録するために工夫されたファイルなど

れをファイリングし、1ヶ月ごとに振り返りながら、今後活動場所をどう運営していくかということを書きディスカッションをしている。年度末にはそれらを集約してアートステーションの運営や立ち上げの仕方のモデルケースとして発信できるようにまとめる予定である。デジタルアーカイブ化に向けた具体的な取り組みとしては、活動日ごとに写真を撮影し、SNSにアップしたら共有フォルダに入れる。書類はGoogleドライブで編集し、確定したものは共有サーバーに入れる。紙の書類はファイリングしておく。この3点をスタッフ全員が日常的に行い、1ヶ月ごとにアーカイブ担当者がまとめてデジタルアーカイブのリソーススペースにアップロードしている。



月に1度行われる活動の振り返り



振り返りの際に検索したデータを一覧する画面

See

アーカイブした写真が簡単にスライドショーとして再生でき、1ヶ月ごとの振り返りで活用できるようにしたり、お客さんに見てもらえるようにしたい。そのため、写真をタグで検索したり、期間をしばって抽出できるようなものを、テクニカルチームと相談してシステムを構築している。アーカイブ作業を「もっと楽に」することで、日常の作業を円滑にしようと考えている。

アーカイブ担当者の所感



「としまアートステーションZのつくりかた」という運営の手引きとなる冊子を作成することになったのだが、今後はデジタルならではの強みを活かして、運営の手引き自体を双方向性のあるデジタル教材にしていけたら面白いのではないかと

テクニカルディレクターとコーディネーターの所感

毎日の最後にスタッフが集まり、その日の活動を振り返る、アーカイブ的な習慣が既に実践されています。新規に開発したアーカイブビューワーが、現場の活動プロセスに自然に馴染み、記録が活動を後押しできるように、ブラッシュアップを継続できればと思います。[須之内]

活動を記録するということを日常に組み込み、アーカイブ業務にありがちな、ひと手間増える面倒臭さをポジティブに解消しようという姿勢が団体の外にも伝播していたのが素晴らしいと思います。デジタルアーカイブでは解消できない、顔の見えるコミュニケーションをもとにした記録手法をいくつも考え出し、現場に落とし込む実践能力の高さ、すばやさ活動がドライブしているなと思いました。アートプロジェクトの記録には決してデジタルだけでは解消できない部分があり、運用でどう解決するかが鍵であるということを感じさせてくれました。[熊谷]

Case—4

きむらとしろうじんじんの
「野点」in 釜石・大槌

きむらとしろうじんじんの「野点」in 釜石・大槌 活動概要

Art Suport Tohoku-Tokyo (東京都による芸術文化を活用した被災地支援事業) の一環で、2012年よりきむらとしろうじんじんの「野点」を大槌町や釜石市にて開催してきた。アーティストとコーディネーターが開催までの期間に定期的に現地を訪れ、地域の人々との関係づくりを大切にしながら、開催に向けた準備を進めてきた。

アーカイブ・プロジェクト スタート時の状況

既に終了している2年分の活動資料があり、さらに2014年度の活動も「3年目」の活動としてアーカイブしていく必要があった。自分たちのプロジェクトのアーカイブ構築という意味合いだけではなく、被災地の状況の資料として重要だと認識していた。



担当者が語る、アーカイブプロジェクトへの参加の動機



渡邊梨恵子

活動資料を整理し、被災地の状況を知る資料にもしていきたい

Plan

アーティストであるきむらとしろうじんじん (以下じんじん) さんの立場からプロジェクトのプロセスを記録していくことと、アートプロジェクトのコーディネーターの立場から記録を残していくこと、2軸でのアーカイブ構築を目指し、2012年度から蓄積していた写真や資料とともに、今年度の資料も同時にデジタルアーカイブシステムにアップロードする作業を進めた。しかし、その過程で震災のときの個人のエピソード、その写真を撮った人が何を考えて撮ったか、いまその記録を見て何を想う

のかなど、写真や書類だけでは残せないものがあると気がついた。きむらとしろうじんじんの「野点」in 釜石・大槌の活動としては、その残せない部分こそが残していきたい部分である。



きむらとしろうじんじんの「野点」in 釜石・大槌のアーカイブテーマ

写真や資料に残せない、
その時の人の気持ちや個人のエピソードを残したい

Do

写真や資料に残せない人の気持ちやエピソードを残す手法として、デジタルアーカイブ化したデータ (主に写真) を1点1点見ながら、撮影したときの状況や写真を見て思い出したことを言葉にして録音する「語りアーカイブ」を実施。写真を見た時に反射的に思い出される記録を最重要視し、取捨選択を行わず、どんな些細なコメントでも残した。文字にしてしまうと記録できない沈黙も記録している。被災地に行ったときの言葉に詰まるような感情などは、ちょっと時間を経てしまっている段階で記録するため、「語りアーカイブ」をいつ実施したのかも記録しておくことが重要と考えて取り組みを実施した。

日常のアーカイブ作業としては、2012年から現在進行しているプロジェクトまで、写真、動画、音声データ、その他の企画書や



リサーチ風景



写真を見ながらコメントを録音しているところ



リソーススペース上で個別データに関連づけて録音するシステム

議事録などのドキュメントデータをリソーススペースにアップロードした。じんじんさんが打ち合わせにいつも用意してくる手書きのレジュメもスキャンして残している。今回の活動のためにこれまで残していなかったじんじんのアトリエの写真なども残すようになった。



きむらとしろうじんじんのアトリエ

See

どういうメンバーで「語りアーカイブ」を実施するかによって、出てくるエピソードが変化する。また、話す人がリラックスしているほうが言葉が出やすいなど、場の作り方が重要だとわかった。アーカイブ化の作業には、写真データと音声データをリンクさせるのに手間がかかることと、写真点数が多いので作業時間が必要である。

プロジェクトを同時進行していく中で、「語りアーカイブ」構築のための時間をどう確保していくかが今後の課題である。現在はパソコンで直接録音を行い、録音した音声デジタルアーカイブ上に直接保存できるようなシステムを開発中であることから、今後はじんじんさんとそのシステムを活用するとともに、活動に関わっていたいる街の方とも振り返りができたら、また違った角度からの記録ができるのではと考えている。

アーカイブ担当者の所感



アーティストの活動の裏側を記録できた

プロジェクトに関わった人たちの写真や資料を総合的にデジタルアーカイブ化することで、より奥行きのあるアーカイブが可能になり、それによって3年間の大槌・釜石の変化や関わった人々の変化も少しずつ浮き上がってきた

「語りアーカイブ」のシステムを開発したことで、それぞれの視点や体験を言葉でシェアし、残すツールとしても活用することが可能になった

テクニカルディレクターとコーディネーターの所感

全ての写真を1点ずつ振り返りながら、じんじんさんの語りを録音していく野心的アーカイブです。写真から想起されることの豊穡性、写真から抜け落ちていることへの想像力、声になった言葉と記述される言葉の性質の違いに今後も注目です。[須之内]

どうしても記録できないことや想いの価値に気づかせてくれた活動です。ひりひりした被災地での場所／人／組織の変化を追うことができれば、非常に重要なアーカイブになると感じました。「残らないことの切実さ」をどう埋めるのかという問いかけに真摯さがあり、胸を打たれました。じんじんさんを囲み、写真を見ながら思い出を録音する場の作り方もとてもうまく、活動の合間に、心情的な部分の準備をするためにもデジタルアーカイブは役に立つかもしれないと感じました。[熊谷]

Case—5

旅するリサーチ・ラボラトリー



旅するリサーチ・ラボラトリー 活動概要

近年、アートの現場において、アーティストによるリサーチをもとにさまざまな作品が制作され、「フィールドワーク」という言葉も本来の学術的な枠を越えて定着しつつある。「旅するリサーチ・ラボラトリー」(以下、旅ラボ)は、フィールドワークをベースとした作品を制作・発表しているアーティスト、mamoruと下道基行が、デザイナーの丸山晶崇、公募により選出したリサーチ・アソシエイトとで結成した。6月後半～8月初旬の約2ヶ月をかけて、作家や研究者だけではなく、独自のフィールドワークの手法とアウトプットを実践している方々を訪ね、インタビューを行い、フィールドワークと表現の可能性についての検証を行った。またリサーチの過程自体をひとつの旅とし、その間に集中的にグループ内でテーマに関する考察を行い、同時にアウトプットの実践として成果物を作成し、広く発信した。

アーカイブ・プロジェクト スタート時の状況

プロジェクトスタート時から、成果物制作のために、活動を記録するためのスタッフを擁し、活動中から記録を心がけていたため、アーカイブ・プロジェクトに参加する前から、まとまった資料が存在しており、既にドキュメントとして活動のまとめた印刷物が存在した。アソシエイトとして参加していた加藤が、もともと自身の活動を通して、作品そのものではなく、それ自体が生まれていく様子を意識して記録したいという考えから旅ラボに応募したという経緯があったことで、デジタルアーカイブに対しても関心を持ち、そのまま担当として関わっていくことになった。



担当者が語るアーカイブプロジェクトへの参加の動機



加藤和也

成果物が生まれていく過程を記録したい

Plan

成果物として既にデータがまとまっていた資料を、改めてデジタルアーカイブにする意義を掴みきれないでいたが、勉強会に参加していく中で、旅ラボの記録として編集された成果物を、A面、B面、C面という考え方で捉え直し、改めて資料データを個人の視点として再編集するという意味付けを起点としてアーカイブを試みることに。舞台を例に例えると、A面が公演された作品自体の記録映像、B面が作品が出来る過程や舞台裏を記録したもの、C面はある個人の視点から資料や記録を再編集したもの。



旅するリサーチ・ラボラトリーのアーカイブテーマ

既に記録されているデータを、デジタルの特質を利用して、新しい編集軸で活用する

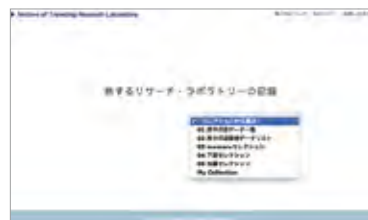
Do

旅の過程で個人的に「面白い」と感じたものをその一個人の記録として再編集する「C面」に重点を置いて取り組む。旅ラボで記録した資料から、メンバーそれぞれがセレクトしたデータを一覧できるようにシステムを設計した。写真、ドキュメント、ムービー、オーディオというカテゴリーに分けて表示し、さ



旅するリサーチ・ラボラトリーの成果物

らにセレクトした個人が旅をどう感じていたか、どういうふうにこのデータを選んだかという文章も加えようと試みている。サンプルとして加藤がセレクトしたのは、旅ラボの主な活動であるインタビューとは関係ないものが多く、すごく狭いお好み焼き屋さんでの写真、インタビューイにお礼として配った手ぬぐいのデータや日報など、成果物を補足しつつ、メインの活動からもれてしまうような資料が実は面白いという視点から選ばれている。今後は手ほどきを受け、ウェブサイト上にデータの検索窓を設置し、整理したタグなどから選んで、資料を閲覧できるようにする予定。



リソーススペースからデータを引き出す検索システムを埋め込んだホーム画面



リサーチの合間のひととき

See

アーカイブをしていく課題は、記録されるメディアが変化してしまうこと。音で言えばかつてはオープンリールで記録していたものをメディアの変化でテープに起こしたが、テープも再生できなくなってしまうために、現在はデジタル化の作業をしているというようなこと。今後デジタルがどの辺まで有効なのかということを含め、長期スパンで考えることが必要である。また、アーカイブ化にあたり肖像権と著作権の問題が大きく、インタビューした方の音声と文字起こしに対し、「この話は公開しないでね」と言われたり、文字起こししたものを本人に修正をもらった時点で編集がかかってしまうなど、アーカイブするものが素のデータとは限らないという部分がある。

アーカイブ担当者の所感



ひとりで取り組むのではなく、熊谷さんや須之内さんというメンターとの話し合いや、他の様々な状況のプロジェクトの苦労話を聞きながら、お互いにフィードバックしていける勉強会という場が非常に良かった

リソーススペースを利用した検索システムのサイトを作る過程では、タグの付け方やデータの残し方など、デジタルアーカイブがアウトプットになることを前提とした場合の有効な記録の残し方を意識していく必要性を感じた

アーカイブを作るということは、なんのためにどのように作るかということを決めるのが大事

これからの活動でも記録をファシリテートし、未来をアーカイブするということを考えていきたい

テクニカルディレクターとコーディネーターの所感

非常に精緻なプロジェクトのドキュメントが既に制作されており、それに続く形でデジタルアーカイブの可能性を考えました。素早く柔軟に記録資料をリスト化し、アーカイブビューワーとウェブサイトを連携させるなど、デジタルならではの編集性を活かした取り組みです。公開が楽しみです。[須之内]

自らリソーススペースの検索システムなどを自分のウェブサイトにも埋め込むためのテクニカルな作業を買って出た唯一のプロジェクトでした。担当者はまさにデジタルアーキビストになりつつあると言えるでしょう。アーカイブ活動自体への関心も高く、ただ記録を残すのではなく、「何のために」記録するかを深く検討しています。デジタルアーカイブを構築すること自体を分析的に考え、活動の意義をきちんと残すための一番最初のプレストの重要性を理解し、今後他の活動にも役立ててくれるとのこと。自ら記録やデジタルアーカイブの活動を設計し、ファシリテートしようと考えてってくれています。とても楽しみです。[熊谷]

Case—6

小金井アートフル・アクション！



小金井アートフル・アクション！ 活動概要

小金井市をフィールドに、市民がアートと出合うことで、心豊かな生き方を追求するきっかけを作ることを目的としたアートプロジェクト。芸術文化によるまちづくりの検討や市民が事業に関わる場づくりを実施する。2014年度はこれまでの活動をアーカイブとして残し、さらに文化政策としてのアートプロジェクト実施について検討した。

アーカイブ・プロジェクト スタート時の状況

「小金井アートフル・アクション！」の活動履歴は長く、2009年のスタート時から、活動の資料が蓄積していた。そうした資料を丁寧に整理することで、自分たちの活動を可視化していく必要があった



担当者が語る、アーカイブプロジェクトへの参加の動機



宮下美穂



高田あゆみ

有機的な組織形態で行われる
活動のアーカイブを試みてみよう

Plan

多様な主体が入れ替わりながら、その場その場で最適な方法や必要な方法を編み出し、トップダウン型ではないコミュニティとして「いつも本質はなんだろうと考えたらいいよね」という活動の指針を持つ小金井アートフル・アクション！の活動下において、必要なアーカイブとはなんだろうと考えた。まずは複数ある事業の中からタイプ

の違うふたつのケースのアーカイブ化を実験的に試みることに。



小金井アートフル・アクション！のアーカイブテーマ

「アーカイブが担うこと、期待されること」を考え、
活動の本質をアーカイブしていきたい

Do

ひとつめのケース、ワークショップを開催する事業では、記録として何が残っているのか、何が残せるのかを整理し、図を作成。参加者間で使用されているクラウド型コラボレーションツールの「サイボウズ」で議論されていることから、活動の動きを読み解けないかを分析。1万枚くらい残されている写真と映像から、自分たちの活動の本質を伝えるアーカイブは何かを考察した。ふたつめのケース、1年間展開してきたさまざまな事業を展示形式で報告するプログラムでは、その展示がどのようにつくられたかをテーマにアーカイブのあり方を考察。参加者が入れ替わるミーティングで議論が重ねられ、展示内容が決定していく過程を、手書きの議事録を中心にアーカイブすることが、活動のやり方や意思決定の方法、思考方法に近いのではと考えている。



アーカイブシステムの検討風景



アーカイブ作業中の様子



壁面に手書き議事録を貼っている様子

See

「小金井アートフル・アクション!」の活動にとって意味のあるアーカイブとは何か?」を考える過程で、自分たちの活動の特徴が、人の役割が伸び縮みするコミュニティの仕組みにあることに気づかされた。そして、そうした活動や組織のダイナミズムをきちんとアーカイブできるシステムにしなければ、活動の本質が伝わらないという結論に達した。局所局所で起っている出来事を記述したり、位置づけたり、共有するシステムとしてアーカイブを考え、さまざまな属性の人が入れ替わり立ち替わり集まるコミュニティの橋渡し役としてアーカイブを考えられないか、また、ローカルな出来事が相互に影響し合うことでクリエイティビティーが上がるようなことを目指すとき、その後押しとしてのアーカイブのあり方が考えられないかと期待している。そうした自分たちの活動を活性化するためのアーカイブと同時に、活動を伝えて、評価に結びつけていくためのアーカイブの方法も考えていきたい。上手に開くことで、アーカイブの客観性や実証性が増し、アーカイブ自体がタフになる仕組みや、新しいストックが入ってくるようなシステムはできないかと考察中。

アーカイブ担当者の所感



デジタルにすることで、よりいっそう活動が前進するようなシステムであってほしい

内向きになりがちな活動が外と繋がっていきけるあり様としてのアーカイブになってくれないかな

システム開発者とコーディネーターの所感

デジタルアーカイブの存在意義に触れつつ、外部に対する活動のプレゼンテーションと議事録の可能性について、密度の濃い検討を重ねました。議事録の創造的可能性に気づかされ、議事録を核にした新たなデジタルアーカイブの実装が進んでいます。
[須之内]

既存の仕組みや思考法を越えるべく、独自の記録／アーカイブの手法を意欲的に研究開発してくれました。NPOなどのゆるやかな組織の活動における主体的な参加者のモチベーションを上げるには? コミュニケーションを促すものとしてのデジタルアーカイブとは? さまざまな問いを投げかけてくれ、とても熱心でした。また、会議後には必ず検証のためのワークショップを市民スタッフとともにやり、現場からの反応を丁寧に拾い、活動をドライブできるデジタルアーカイブの仕組みを検討しています。とはいえ考えれば考えるほど、固定的な仕組みは使えなくなります。活動に合わせてシステムを変更できるデジタルアーカイブのシステムを活用すれば随時システム変更も可能ですが、活動の流動性が高い場合、それをいかに留め置くかには課題が満載です。[熊谷]

2014年度デジタルアーカイブ・プロジェクト 最終報告会を終えて

齋藤歩×須之内元洋×熊谷薫

須之内：今年は各団体がアーカイブを「何に活用したいか」「どういうふうに使いたいか」を掘り起こし、「アーカイブの作業を通じて見えてくるものを探ってみよう」ということを大切にプロジェクトを進めてきました。先日の最終報告会ではデジタルアーカイブの証拠性をどう担保するのかという質問があったのですが、その話がきちんとできなかったことが心残りです。お越しいただいていたレコード・マネジメントや文書管理の専門家で、アーカイブ・キットの業務分類表を作成してくださった齋藤柳子さんから、「アーカイブ・キットの業務分類表を遵守してきちっとデータを格納しておけば、そこから証拠性が生まれる」というお話があったと思うんですが、アーカイブ・キットの業務分類表を全てきちっとやるというのは不可能なのでは？という疑問もありまして。

齋藤：齋藤柳子さんのコメントは、アーカイブでは組織による活動の証拠が強く残る記録のタイプが決まっているので、それをどう残していくかを中心に議論すべきではないかという指摘でした。そうした記録は、たとえば議事録や財務諸

表ですね。「アーカイブとは証拠性を保証すること」という前提で議論しなければいけないはずなのに、先日の最終報告会は、どちらかというと記憶（メモリー）に寄与する記録の話が中心だったと思います。報告者の皆さんが見せてくれたのは、作家が書いた手紙やメモ、デジカメの風景写真などの個人的な記録でした。それらは組織が活動した証拠性が残り難い記録のタイプです。アーカイブの基礎となる証拠性とは距離が遠い。

熊谷：そもそも議論の対象となっている記録のタイプが違いましたね。とはいえリソーススペース内はアーカイブ・キットの業務分類表に基づく分類がすでに入れているので、証拠性の高い議事録や会計書類はここに残しましょうということは大前提に、さらにメモリーをどうしようかという議論が展開されていました。その上でマネジメントの基本として証拠性が高いものを残してはいますが、皆、メモリーの方に関心があるから…。

齋藤：放っておくとそちらに意識が向かうことが良く分かりました。

熊谷：両輪を走らせないといけないです

よね。証拠性が強い記録があった上で、メモリーがあると。

須之内：アートプロジェクトのデジタルアーカイブをやるという前提でこのプロジェクトが進んでいますので、あえてお伺いしたいのですが、アートプロジェクトにとって証拠性の高い記録を残すことが何に繋がるのでしょうか？

熊谷：たとえばMoMA アーカイブズを研究者として利用するという目線で言うと、会計書類などの証拠性が強い記録はあまり見ないけれど、作家のメモとかそういうものや、キュレーターがリサーチした時の資料群などは見ます。アートを理解するためには証拠性の低いものが必要なんですね。アートの活動の豊かさを残し、将来的にどう記述し評価していくかという目線が、私にはどうしてもあるので、メモリーにあたるような、作家やプロジェクト参加者の思考の痕跡はなるべく残したいと感じるところです。

齋藤：バランスが大切ですよね。証拠とメモリーのバランスは、組織内アーカイブと収集アーカイブの違い、つまりアーカイブ機能の違いとして表われます。熊谷さんは研究者として作家のスケッチやキュレーターの私文書など、いわば収集アーカイブの方に関心を寄せているとのことでしたが、MoMA アーカイブズは組織内アーカイブとしての側面もあり、極

めて重要な機能です。そもそも組織内アーカイブがなければ、収集アーカイブが成立している裏付けが取れませんから。英国のテート・アーカイブズは、テート・モダンができたときの建物改修のコンペ資料を組織内アーカイブとして残しています。昨年訪問時に閲覧申請をして、手紙やスケッチから館とコンペ参加者とのやり取りを追跡することができました。ここでも組織が作成するそうした記録を残す活動と並んで、収集アーカイブが存在しているのです。収集アーカイブのタイトルには作家名や作品名が付されるためか、ついそちらの機能が注目されがちで、日本のアート・アーカイブの文脈もその方向に進みつつある印象を抱いています。しかし、2011年の公文書管理法の施行を受けて国立美術館が「法人文書ファイル管理簿」を公開しているように、日本の美術の分野でも組織内アーカイブと収集アーカイブを相互補完的に語る素地は養われているといえます。

熊谷：作品研究においても、やはり組織内アーカイブは大前提として必要ですね。研究時にそこにアクセスする必要性も、もちろん出てくると思います。証拠性の強い記録のアーカイブをきちんとやっていこうというのは、各団体の皆さんに納得して取り組んでもらってはいるんです。けれど、あまりに細分化された分類

まで考えると気重くなる感じで。例えば「会計」という分類までは付けるという感じ。実際には、アーカイブ・キットの業務分類表を伸び縮みさせてもいいという解釈で運用しています。この業務分類表は、アートプロジェクト以外のたとえば企業の方なんかに見せると、すごく反応がいいんですけどね。

齋藤：行政機関では業務分類表にしたがって文書を作成することが原則です。アート・アーカイブ・キットの業務分類表に保存年限が記載されているように、文書の作成段階ですでに残すものと残さないもの、加えてその残し方が決まっています。行政に限らず組織の文書管理規程があって、文書作成ルールが定められているはずなので、企業の方々に「原則」としてご理解いただけるのはそのためではないでしょうか。

熊谷：その組織の形態が流動的というか“ふわん”としているところが、アートプロジェクトの難しさですね。例えば小金井アートフルアクション！にしても、決裁のやり方が一通りではなかったり、関わる人が流動的だったり、輪郭の無い組織形態で運営している場合、どうにも難しい。しかし文書管理もきちんとやるべきで、その上でゆるやかにアーカイブを進めていかなくては、プロジェクトのエンジン自体が止まってしまうような感覚もある

るんです。バランスが難しくて。

齋藤：アーカイブを構築するメリットは、それぞれに感じてもらうしかないですね。組織のあゆみをまとめて自らのアイデンティティ形成に寄与するとか、担当者の引き継ぎが発生した時にメリットがありますなどとは言えますが、目的を明確にしてその実現のために制度化することは、各自の主体性が削がれるようで、ここでは不釣り合いですね。

須之内：そもそもアートプロジェクトというのは、既存の組織のやり方で通用しないようなことだったり、何かもやもやとしたものに対し、ゼロからプロセスを作って取り組んでいたりするのが、大きな特徴だと思います。その時に、既存のアーカイブ手法ありきというよりも、アーカイブ的なプロセスやアーカイブの利点などを上手に抽出して、アートプロジェクトの良さも失わずにアーカイブのメリットを取り込んでいこうというスタンスでやってきたのかなと、改めてお話を伺って感じました。今後はこれまでの延長でやっていけばいいのか、それともさらに多様な視点で取り組んでいったほうがいいのかは悩むところです。

齋藤：自分たちの活動を相対化するためにスタンダードを知っておけばよいと思います。いいところは取り入れていけばいいし、自分たちのやり方をそのまま貫く

部分があってもいい。アーカイブズ学では汎用性を担保する必要があるのも、基本的には標準的なモデルを示すことになります。その前提で端的に手法を解説しようとする、結果として強い強制力をともなった語り口になってしまう。けれど、アーカイブズ学の論者は必ずしも枠

組みに押し込むことを目的に据えているわけではありません。アーカイブズ学は実践的な学問なので、理想と現実の違いは経験としてわかっていて、むしろ理想とかけ離れた現実を直視することから学問の課題を見出すところがあるように思えます。先日の最終報告会で紹介したテリー・クックも、ナショナル・アーカイブに務める傍ら研究者でもありましたから、理想と現実の狭間で悩みながらも、そうした経験があったからこそ現在のアーカイブの実践でとらえきれない存在があることに気がついたともいえます。クックによる「証拠」「記憶」「社会」「コミュニティ」の議論(P.7参照)は、そうした文脈で理解したいです。こうした議論は抽象的なうえに言葉が用意されてこなかったためか、日本では語られる機会が多くはありません。先日の最終報告会でのレクチャーはその意味で実験的でもあったわけですが、馴染みが深い言葉が並ぶので



左から須之内元洋、熊谷薫、齋藤歩

議論の糸口として役立つことはわかりました。アーカイブの理解を共有するためにはこういう話をもう少し積極的に展開していく必要もあるのかもしれませんが、アーカイブズ学の専門家は、物事を枠組みにはめたがる、すごく頑なな態度をとる人と思われている節があるので……。

須之内：それはあります(笑)

齋藤：柔軟でなければアーカイブをとらえ損ねることもあります。隣接領域の図書館情報学などは扱う対象が図書なので、分類体系をはじめとして考え方が比較的緻密です。書物をつくるということは——これは編集者としての個人的な考えですが——定められたフォーマットに情報を整えていくことの引き換えとして流通性を獲得することなので、適用するルールが厳密であるほど高い成果をえられるはずで。先日、筑波大学で図書館情報学を専攻する学生向けにアーカイブズ学に基づく目録の作り方というレクチャー

をした際に、学生たちからは「目録作成のルールがあまりに曖昧で驚いた」という感想をもらいました。図書館情報学のような厳密なルールがある世界に比べて、アーカイブズ学はあまりにもいい加減に映ったのかもしれませんが。扱おうとする対象が図書と違って多様で大量なことがアーカイブの特徴なので、あまり厳密なシステムを設けても破綻してしまいますから。まだ勉強をはじめて数年足らずですが、アーカイブは「曖昧な領域が残る前提でものごとの整理を進めていく」という矛盾する行為と理解しています。これはなかなか理解し難いですね。もちろん行政機関で公文書を扱う場合は厳密なルールが必要です。さきほどアーカイブの機能に触れたように、民間企業、大学、文化施設といった機関の役割によっても考え方が異なります。目的に応じて精度をチューニングしてバランスを取っていくという言い方が適した表現なのかもしれません。そのバランスを保つための基準がモデルやスタンダードです。

須之内：アートプロジェクトに関わっている人達は、自分たちがやっていることの価値がまだ曖昧で、直感にすぎない段階から実験的に街の中で活動をしていて、試行錯誤をしている状態だと思います。そんな彼らがアーカイブに期待していることは、社会の人々から「何をやっている

か分からない」と言われることに対し、対外的に説明できる資料の蓄積や、内側に向けて「自分たちがどういうやり方で何をしようとしているか」を共有するための母体となることなんだと、大きくこの2つのニーズを感じています。自分たちの活動の後押しや、組織を強化してくれるアーカイブであって欲しいと。そうしたニーズに対し、現在はアプローチの仕方を考えて、アーカイブ的な方法論を援用してやってみようという感じでいます。

[2015年2月22日、
東京文化発信プロジェクト ROOM302にて収録]

齋藤歩

1979年生まれ。編集者。女子美術大学非常勤講師。学習院大学大学院人文科学研究科アーカイブズ学専攻博士後期過程。メディア・デザイン研究所にて書籍やウェブサイト等の企画と編集に従事。同社での担当=大山エンリコイサム『アゲインスト・リテラシー——グラフィティ文化論』、藤村龍至『プロトタイプینگ——模型とつづやき』、『3.11とアーティスト——進行形の記録』記録集』、『AIR_』（アーティスト・イン・レジデンス・ジャパン）、『10+1』DATABASE』ほか。研究テーマは建築レコード (Architectural Records)。

須之内元洋

札幌市立大学デザイン学部助教。ソニー株式会社、サイボウズ・ラボ株式会社勤務を経て現職。メディア環境学、情報科学、音の環境学の分野で研究を行う他、デジタルアーカイヴをはじめとした各種デジタルメディアの設計・開発、メディア・アートの実践を行う。

熊谷薫

デジタルアーカイブ・コーディネーター / アートマネージャー。東京大学美術史学科修士課程修了後、NYの市立大学に留学し戦後美術について研究、グッゲンハ임美術館でのインターンを経て帰国。2014年よりフリーランスとして、東京アートポイント計画共催団体や、五十嵐靖晃「くすかき - 太宰府天満宮 - 2014」、ヨコハマ・パトリエンナーレ 2014 等へのデジタルアーカイブシステムの導入コーディネートを手がける。

ふりかえりと今後の課題

本冊子で紹介してきた6つのアートプロジェクト運営団体におけるアーカイブは、担当者が主体的にデジタルアーカイブの検証実験に関わってくれたため、当初想定していた、データを無選択的に保存して一元管理を図る第1段階を大きく超えたものになった。しかし、その次の段階といえる、一元管理されたアーカイブを一般公開するためのビューワー作成を行ったのは1団体のみであった。多くの団体はアーカイブを一般公開することに慎重であり、公開までの過程により多くの時間を要するとの判断があった。しかし、アーカイブ担当を担ってくれた彼らのほとんどから、現場の記録を残すためのシステム開発や、活動をドライブする運用の手法自体に関心が集まったことは注目に値する。また、最終報告会には企業や大学などの専門家の参加がみられ、取り組みに対する注目度が上昇したと感じられた。

2014年度には「なぜ」「なんのために」「どうやって」記録を残すかを丁寧に考え、各団体の要望に合うアーカイブシステムの追加機能を開発することになったが、それは個別解の追求になりすぎたかもしれない。今回はコーディネーターとテクニカルディレクターが個別に団体の要望をヒアリングすることで、柔軟に対応することができたが、今後さらに多くの人にデジタルアーカイブ・システムを導入してもらうためには、アートプロジェクトにとって汎用性の高いシステムの開発が必要である。また、アーカイブ構築の基礎的な知識、思想や運用手法を、より多くの人(特にアートプロジェクトのマネジメントを行う人)に共有していくことも今後の重要課題だろう。アートプロジェクトのような活動を社会化するためには、知識の共有が重要である。2014年度のデジタルアーカイブ・プロジェクトのスタート当初から「他団体のデータを参照できるようにすることで、デジタルアーカイブを共通知にしたい」という要望もあったが、本年度はその段階までは至らなかった。今後は個々の団体が管理するデジタルアーカイブの仕組みを一つのプラットフォームに載せ、共有することが必要になってくるだろう。デジタルアーカイブは今後、少ない人的・金銭的リソースで活動を社会化するための仕組みとなることが求められる。[熊谷薫]

この冊子は「東京アートポイント計画」のリサーチプログラム「Tokyo Art Research Lab」の一環として実施された「アートプロジェクトのインパクトリサーチ：デジタルアーカイブ・プロジェクト」の事業成果物として作成されました。

Tokyo Art Research Lab (TARL)

アートプロジェクトを実践する全ての人々に開かれ、共につくりあげるリサーチプログラムです。現場の課題に対応したスキルの提供や開発、人材の育成を行うことから、社会におけるアートプロジェクトの可能性を広げることを目指しています。

www.tarl.jp

東京アートポイント計画

東京アートポイント計画は、地域・市民が参画するアートプロジェクトを通じて東京の多様な魅力を創造・発信することを目指し、「東京文化発信プロジェクト」の一環として東京都と公益財団法人東京都歴史文化財団が展開している事業です。

www.bh-project.jp

＊「東京文化発信プロジェクト室」は、2015 年 4 月 1 日より「アーツカウンシル東京」と組織統合する予定です。

**デジタルアーカイブの営みをつくる
アートプロジェクトの現場から**

執筆	須之内元洋、熊谷薫
編集制作	友川綾子
デザイン	阿部太一 [GOKIGEN]
発行	公益財団法人東京都歴史文化財団 東京文化発信プロジェクト室 〒130-0026 東京都墨田区両国 3-19-5 シュタム両国 5 階 TEL:03-5638-8800 FAX:03-5638-8811 Email:info-ap@bh-project.jp URL:www.bh-project.jp

